

清水幾太郎における自然と人為 (2) －平和運動と転向－

荻野 雄

Nature and Artifice in Ikutaro Shimizu's Philosophy (2)
－ Pacifist movement and Conversion －

Takeshi OGINO

Accepted July 19, 2011

抄録 : 第二次世界大戦後、清水幾太郎は平和運動に積極的に関与していく。彼の目的は、日本からの軍事基地の撤去、日米安全保障条約の廃棄、そして社会主義の実現であった。しかし清水の運動は挫折を重ねていき、1960年の日米安全保障条約改定反対運動で、清水は、組織を守ることを重視する日本の革新政党に決定的に幻滅する。清水は政治活動から身を引き、1965年に主著の『現代思想』を書いて自身の政治運動を反省する。この著書では、1930年代が問い直され、日本で神聖視されている人民戦線が根底的に批判される。その後、近代化を遂行した国家の側に立つことを決意した清水は、次第に保守化していったのだった。

索引語 : 清水幾太郎, 平和運動, 日米安全保障条約, 人民戦線

Abstract : After World War II Ikutaro Shimizu actively participated in the pacifist movement, his goals were the removal of U.S. military bases from Japan, the repeal of the U.S. - Japan Security Treaty, and socialization of Japan. His efforts toward the attainment of his ideals were fraught with setbacks and with the movement against amendment of the U.S. - Japan Security Treaty in 1960, Shimizu finally became disillusioned with the Japan's progressive parties, who seemed to set party interests above all else. He retired from the pacifist movement and reflecting on his political activities, wrote his main work "Modern Thought". In this book Shimizu re-questioned the 1930's and thoroughly criticized the people's popular front, which was considered sacrosanct in Japan. Later he would decide to stand in support of the state's execution of modernization and gradually became conservative.

Key Words : Ikutaro Shimizu, pacifist movement, U.S. - Japan Security Treaty, people's popular front

1. 「清水幾太郎の時代」

困難な戦時中を危うい歩みながらも何とか切り抜けた清水幾太郎は、敗戦後、新しい時代にふさわしい著述家として多くの原稿を依頼されるようになった。要望に応じて精力的に執筆してはいたが、清水自身の述懐によれば、戦後しばらくの間彼は冴えなかった。アメリカ占領下での「自由主義的民主主義」を讃える大合唱に、清水は加わっていくことができなかったからである。なるほど、軍部や封建的な勢力の一掃によって、日本の自由主義的民主主義は復活するかもしれない。しかし、そもそも軍部が台頭したのは、戦前の日本の自由主義的民主主義が機能しなかった結果ではないのか。とすればそれが復活したからといって、問題の、特に経済問題の解決にはならないはずである。「一九二〇年代の民主主義、あれが外国人の眼にどう映っているとしても、日本人にとっては、あんなものでは、どうにもならない、と思った。あのハイカラで生温かい一九二〇年代は、結局、軍国主義的な一九三〇年代の母体であるとししか考えられぬ」（清水、1953a, 112 頁）。新しく現われた「善玉」に乗ることもできず、さりとてそれと対決することもできず、清水は歯切れの悪い曖昧な態度を余儀なくされた。「われながら中途半端な……この態度は、昭和二十三年の秋、私が平和運動へ入って行った頃まで続いたようである」（清水、1975, 112 頁）。冷戦の開始に伴うアメリカの対日政策の転換によって、現実の情勢の中に自身の立ち得る余地が作られ、清水は生氣を取り戻した。彼は政治活動に積極的に関わり、「進歩的知識人」として注目を集め、時代の寵児となっていく。

清水が最初に関わった運動は、全面講和を訴えた知識人の組織として有名な「平和問題談話会」である。この会はもともと、当時の或る代表的言論誌の編集長が、1948 年にパリのユネスコ本部で発表された「戦争の原因に関する 8 名の社会科学者の声明」に刺激され、日本の学者からも同様の宣言を出すことを意図して発足させたものである。清水は 1948 年 9 月にこの編集長に誘われて会に参加し、幹事として事実上事務を取り仕切り、1949 年に発表された談話会の共同声明「戦争と平和に関する日本の科学者の声明」も起草した。やがて講和問題をめぐる議論が活発化すると、平和の訴えとは違いメンバーの意見が分かれるこの問題についても、清水が奔走して会としての見解を取りまとめ、その結果 1950 年に平和問題談話会は、「全面講和、日本の中立化、日本国内の米軍基地の撤去」を主張する、やはり清水の筆になる「講和問題についての声明」を発表したのだった。

結局、1951 年に中ソ抜きで講和条約と日米安全保障条約が締結され、平和問題談話会は活動を停止する。書齋に戻っていく学者たちを尻目に、清水は運動に留まり、「総評および左派社会党」と行動を共にして、1953 年には米軍の試射場建設を巡る石川県内灘の事件に積極的に関与する。内灘は最初の軍事基地反対闘争であり、清水は 1 年間に 4 回も内灘を訪問して住民を励まし、演説し、カンパし、世論喚起のため各種の雑誌に数多くの文章を寄稿した。清水は内灘に強い手応えを感じた。人々の生活に密着した、言い換えれば人々の生命的欲求に裏付けられた基地反対運動と一体化しながら、清水はこの運動が展開する先に、安保条約破棄、さらには社会主義までも見据えていたのだった。¹⁾「第一、言うまでもなく、禍根は、講和条約、これと抱き合わせの安全保障条約、これに伴う行政協定で、これらの廃棄まで持って行かねばならない。第二、基地反対の運動は、今後の平和運動の本筋となるべきものである。憲法擁護など、とかく、インテリ中心の狭いものになり易かったが、基地反対の運動となれば、広く民衆の日常の利害と勢力とを吸い上げることが出来る。それだけに綺麗事で済め面が出て来る一方、平和運動が本当の国民的規模の運動へ発展する条件も生まれて来る。即ち、基地反対の闘争は、民衆の日々の生活に根を下ろしながら、而も、日本の運命を握る両条約の廃棄と結びつ

いている。一私は、心中ひそかに、これだ、と叫んだ。おぼつかない手探りで話しているうちに、やがて、これは私の確信になった」(清水, 1953b, 74 - 75 頁)。こうした思い入れも虚しく、内灘闘争は反対運動の敗北に終わり、そればかりか清水たちの活動は地元住人の一部から強く反撥もされた。何より清水を落胆させたのは、左派社会党が反対運動に真剣ではなかったことである。議会進出を通じての社会主義政権樹立を目指す左派社会党にとっては、共産党に接近し過ぎることなく、地元を理解者の組織を作って票を増やすことが問題であった。清水の眼には、真剣に基地反対運動を展開しているのは、共産党の若者だけであるように映った。

続いて清水は、1955 年に始まる東京立川の米軍飛行場拡張反対運動、いわゆる「砂川闘争」に関わっていく。砂川では政府を測量中止に追い込んだから、反対運動は一応勝利を収めたとは言える。とはいえ砂川闘争は、東京地方裁判所から安保条約違憲判決を引き出したことで有名ではあるものの、「もともと、アメリカ空軍基地の拡張で土地を捕られるのは困るという地主たちの始めた運動で、社会主義と何の関係もありはしない」(清水, 1975, 438 頁)。そのうえこの闘争で、清水は今度は共産党にも幻滅する。共産党も、社会主義を勝ち取るために真剣に闘っていないのではないか。実際、日本共産党は、1951 年の武装闘争路線で国民からの支持を完全に失ったことに懲りて、1955 年の共産党第六回全国協議会(六全協)で方針を転換し、「幅広い統一」、いわば人民戦線の方針に転換していた。「有名な六全協(昭和三十年七月)で、彼らは謂わゆる極左冒険主義を捨て、ソフトなニコニコ戦術に転じ、それからは、以前の自分たちの行動を、まるで敵の行動であるかのように非難している。……反省や批判の度が過ぎたのか、間もなく、彼らは自分たちの過去を忘れたような顔をして、自分たちの指導部の決定した戦術—ニコニコ戦術—より少しでも強い戦術に出る集団や組織に出会うと、見境もなく、これを極左冒険主義者やトロツキストと罵って、これを本当の敵以上の敵として扱うようになった」(清水, 1975, 372 - 373 頁)。そして清水は、砂川闘争で身体を張って反対活動を行っていた全学連主流派に共感を深めていく。このように既存の革新政党への失望を重ねながら、次第により急進的な陣営へと流れていった清水は、同時に次第に孤独にもなっていた。また、覚悟の上のこととはいえ、運動のために文章を自己検閲しなくてはならなかったことも、彼を疲れさせていた。

そうした中、1957 年に首相となった岸信介が日米安全保障条約の改定に着手したことから、清水が関わった最後の政治運動である安保闘争が始まる。岸内閣の動きに対して 1958 年 6 月に憲法擁護の立場の「憲法問題研究会」が発足すると、清水も直ちに加わった。清水の狙いは、この機に乗じての安保条約そのものの廃棄であった。しかし安保改定阻止運動中、清水はむしろ左翼政党に厳しい批判を投げかけていく。それは国民の幅広い統一、いわば「人民戦線」の維持を重視して、左翼学生を「一揆主義者」と決めつけ、彼らが実力行使によって勝ち取った成果を放棄しているではないか。「実際、一九五九年十一月二十七日に安保反対のデモ隊が国会構内に入った直後、また、一九六〇年一月十六日に学生が羽田空港に座り込んで、岸首相の調印のための渡米を阻止しようとした前後など、指導部が大衆行動への非難だけを空しく繰り返して、膨れ上がったエネルギーを全く行き場のないものにしてしまったことは明らかである」(清水, 1963a, 12 頁)。運動に参加した国民の内部には「豊かなエネルギーがあった」にもかかわらず、「諸組織—特に日本共産党—の指導部」によってその発現が抑圧されてきたことを、安保闘争終了直後に清水は弾劾した。「[全学連以外の]その他の有力な諸組織には、新安保阻止より大切な何物かがあったようです。この何物かは、党員の獲得や総選挙の準備ということであったかも知れません。また、大衆が政治闘争に深入りしてくれては元も子もなくなる経済主義的指導者の地位であったかも知れません。また、膨れ上がったエネルギーが安保を叩き潰した余勢を

駆って、民族解放戦線の枠に傷をつけるかも知れない危険ということであったかも知れません。いずれにしろ、新安保阻止より大切な何物かを守り得る限度に新安保阻止の運動をとどめ、この限度を超えて行こうとする人間や集団を『トロツキスト』や『敵の手先』に見立てることになったのだと考えられます」(清水, 1960b, 152 頁)。清水は 1960 年 4 月に「今こそ国会へ——請願のすすめ——」(清水, 1960a) を発表し、国民一人一人が国会へ行つて、新安保条約を承認しないよう要求する請願文を衆参の議長に渡そうではないかと、直接行動を煽った。この文章は「大きく蓄積されたエネルギー」に「文句のない捌け口」を指示したから、絶大な反響を引き起こし、「連日、請願のデモ隊が国会を訪れるようになった」(清水, 1975, 458 頁)。しかしそのせいで清水は共産党系の勢力から猛攻撃を受け、「正式に(?)『トロツキスト』ということになった」(清水, 1983, 191 頁)。

アイゼンハワーの来日に間に合わせるため、自民党が 1960 年 5 月 19 日に新安保条約を衆議院で強行採決したことをきっかけに、それまで十分な盛り上がりを見せていなかった安保改定反対運動は国民的規模へと広がっていった。しかし同時にそれを契機に「インテリ指導者が前面に出て来て」(清水, 1983, 199 頁)、反対運動の目標は「民主主義擁護」へと転換してしまう。清水はこのことにも強く反撥した。「多くの友人には申訳ないが、あの時、私は民主主義の危機など感じてはいなかった。……とにかく、私にとっては、民主主義などはどうでもよかった」(清水, 1975, 464 - 465 頁)。「民主主義の再建」(竹内好) などというスローガンは、清水にとって「幅の広い統一と団結という不潔な方針の完成」(清水, 1975, 469 頁)なのであった。「指導部が、一方、新安保反対のエネルギーを指導する能力がなく、その処理に手を焼き、他方、自分たちの敗北の責任を何とか避けようとして、インテリに向つて、『新安保反対』から『民主主義擁護』への目標の転換を頼んだのではないか。頼んだのではないとすれば、自ずから相通ずるものが最初からあったのか」(清水, 1975, 470 頁)。全学連の過激な行動に危機を感じた大新聞が、共同宣言を出して「暴力を排し議会主義を守れ」と訴えた翌々日の 6 月 19 日 0 時に、新安保条約は成立する。反対運動は岸を退陣に追い込んだから民主主義は擁護したかもしれないが、清水の企図した目的は無視され放置された。6 月 18 日の日記に清水はこう書いたという。「夕方、家中で国会へ行く。全学連徹夜の座り込み。……共産黨員某曰く、『先生、これで日本も漸くフランス革命の辺りまで来たのでしょうか。』ああ、こいつは、コミンテルンのテーゼを信じ、日本がまだ絶対主義の時代にいるものと思ひ込んでいるらしい。馬鹿な奴だ。共産党系インテリ某、うっとりした表情にて、余に向つて曰く、『あの人民戦線というのは、こういうものだったのでしょうかね。』人民戦線が、何でそんなに有難いのか。ハイカラな感じがするからか。馬鹿な奴だ。……携帯ラヂオがチーンと 12 時を報じる。……新安保、参議院にて自然成立。涙が出て来る」(清水, 1975, 480 頁)。

安保闘争終了直後に、これで大きな何かが終わったことを清水は感じた。「最近の一年半というのは、この十年間、片時も忘れることのなかった敵と再び正面から戦うようになった日々なのであります。……今、私たちが立っているのは、一つの戦場が、ではなくて、一つの戦争が終わった地点であるような気がしてならないのです。言い換えるならば、日本および日本人の運命を真面目に考える限り、新安保運動阻止の運動は、他の何物かの集団—例えば、党员獲得とか総選挙の準備とかの手段であつてはならない。それは、全身全霊を挙げて最後まで戦うべき問題であつたのであります」(清水, 1960b, 138)。実際安保改定問題は、清水が期待したように革命へと通じることなどはおそくなかったにせよ、左翼政党と一般の人々とを繋げる決定的な機会であつた。それを逃した日本の革新政党は、清水も評価した 2 年後の「江田ヴィジョン」も握り潰して、基本的には退潮傾向に陥っていく。他方で自民党は岸の後を継いだ池田の経済成長路線によって、多くの国民の支持を攫っていった。清水の予感

どおり、「戦後の一切の平和運動の総決算」（清水，1980，266 頁）である 60 年安保の終了と共に，なお先行きの定まらない，「思想というものが現実を構成する力を持っているように感じられた」（清水，1979，293 頁）時代も終わりを告げ，戦後日本政治の基本的な方向性が固められたのである。

2. 清水幾太郎の「転向」

安保後社会運動から身を引いて研究室に籠った清水は，自身の「経験」を消化する過程で或る変貌を遂げていく。人為によって自然に抗い，かつ自然として「不自然な」人為的構築物に反逆するという複眼的な姿勢は，変わらずに彼の思考の根幹的な枠組みであり続けながらも，清水は社会主義および「戦後的なもの」に批判的になっていったのである。ただし清水がそれらに加えた批判の全てが，彼の「転向」の帰結ではない。日本の「進歩的知識人」たちがマルクスの教義の不可謬性を疑わず，経験による理論の修正も歴史の進路に対する人間の決断の影響も認めないこと，加えてコミンテルンの託宣に従って日本の歴史を図式的に裁断することを，清水は厳しく糾弾するようになったとしても，こうした批判はむしろ，これまで見てきた彼の根本思想の当然の結論であるだろう。また「戦後民主主義」との関係について言うなら，清水は一貫して自由主義には批判的であったうえ，民主主義も「自然的欲求」との関係において考えていたから，通常理解されるそれとは当初より一定の距離を置いていたと言える。例えば彼自身重視し，また大熊信行も評価した敗戦直後のエッセイ「体験と内省」で，清水は「デモクラシー」を，「人間を持って幸福を求めるものと考え，幸福の内容を欲求の充足と見る」（清水，1946，27 頁）ことと定義していた。自律した市民による主体的な政治運営の意味での民主主義が，自己目的として，清水から熱烈な愛情や忠誠を引き出したことはなかったのである。

清水のうちに変化を引き起こしたのは，何よりも，彼の社会運動を躓かせた人民戦線戦術に関する集中的な研究であった。戦後の日本の政治運動では，「一九三〇年代の人民戦線」がいつも感激と羨望をもって語られ，モデルとされてきた。しかし日本の運動における経験は，「フランスやスペインの人民戦線にしても，そう結構なくめのものではあるまい，という常識を私に与えた。その後，この常識をテストするのが私の仕事になった」（清水，1966，302 頁）。人民戦線を生み出し，若き清水をも巻き込んでいった 1930 年代の大きな歴史的うねりの中では，本当はいかなる事態が進行していたのか。数多くの文献をかき集めてこの時代を召喚した清水は，日一日と秩序が崩壊していくさまを目撃し，満たされない自然的・生命的な欲求の咆哮を聞く。そして，瓦礫の山と化した世界に，思想も思想を体现する政党も自失状態で立ち竦む中で，爾余の「社会」集団とは存在の位相を異にする国家が，新たな秩序の構築者として清水の前に立ち現われてきたのだった。国家の決断が混乱を收拾するのを見届けた清水は，最終的に社会的多元論から離れていく。清水の転向とは，社会から国家への転換であった。さらにこの変貌と共に，1930 年代以降の（社会）思想は清水にとって，自己を現実化する力をもはや失ったもの，実現されているように見えても実は「ナショナル・インタレスト」の「アクセサリ」に成り果てているものとなった。清水のこの転換の産物が，1966 年の『現代思想』である。清水の主著と言うべきこの著書は，題名が期待させるところとは違い，20 世紀を「実体的で包括的な大思想が次第に分解して行くプロセス」と捉える視点の下，世界からの思想の消失を，自身の生涯と重ねながら「二〇世紀初頭」，「一九三〇年代」，「一九六〇年代」と辿っていく作品となっている。

『現代思想』の論述は，19 世紀のヨーロッパを「リアリズム」の時代と規定することから出発する。

人間的自然（自由放任とその帰結の経済成長）を信じた 19 世紀の社会では、その信頼が報われていたがゆえに世界はそのまま意味ある統一であると見なされ、芸術家も社会学者も現実の模写に努めていた。リアリズムはヨーロッパの自己満足の表現であった。それを崩落させる「ニヒリズム」が、まず「二〇世紀初頭」（『現代思想』第一章）に少数の天才たちによって予感された後、恐慌と共に幕を開ける「一九三〇年代」（『現代思想』第二章）に大衆の生活にまで流れ込んでいったということが、『現代思想』の根本命題となっている。「諸個人が独立の決定メーカーであるような社会と、その思想としてのリベラリズムとの決定的崩壊が、終始、一九三〇年代の基礎である」（清水，1966，80 頁）。不動の大地として信用していた自然に裏切られ、大衆は最低限の衣食住の確保の目途すら立たなくなり、社会の秩序は瓦解する。大衆の規模で実現されるニヒリズムとは、「失業、飢餓、闘争、殺戮」である。失業は単に生物としての生存を困難にするだけではなく、その存在が社会的にもゼロであることを人間に宣告する。このとき大衆にとっても、「リアリティが崩れ、それが無意味な客体の混沌になり、人間の主体が統一を失い、無意味の細片に砕けて行った」（清水，1966，79 頁）。この廢墟で彼らは生命的欲求そのものとなり、呻きながら救いを求めてさまよったのだった。

ところがリベラリズムはもちろん、この「終末の日」を預言し期待すらしていた共産党や他の社会主義政党も、大衆に手を伸ばすことはできなかった。清水によれば、自由主義もマルクス主義もアナキズムも、「人為的桎梏」である国家に背を向けて「自然的な流れとしての社会」を信じるところに成り立っており、つまりは「或る客観的秩序が社会の内部に刻み込まれている」ことを前提としている。マルクスは資本主義の必然的な崩壊の地点までしか説いておらず、社会が客観的秩序を持たない混沌であることが露わになれば、マルクス主義は人々を導く指針としては無力であった。そのため、革命後のレーニン指導下のソヴィエトでは、それは近代化のための道具に、将来の飢餓からの解放を約束して国民に現在の飢餓を受け入れさせる観念的興奮剤に身を落とし、国家に仕えていったのである。「革命政府のエリートは、その社会の経済発展が遅れている場合、何は措いても、大衆を経済開発に動員しなければならない。エリートは、インダストリアリズムの掟に従って動き始める。ここでも、思想は飢餓とともにある。……一方、エリートの側から見れば、思想は、低い消費と烈しい労働との生活を大衆に向かって弁明する機能を果たさなければならず、他方、大衆の側から見れば、何物かを信じてのみ堪え得る生活のうちで、思想は彼らを救い、慰め、励まし、脅かす機能を果たさねばならぬ」（清水，1966，177 - 178 頁）。このことも示唆するとおり、混乱に還った社会＝自然に向けて決定を下すことができるのは、法則も内在的秩序も信じない、人為的桎梏としての国家だけであった。国家への抵抗感が他国よりも薄かったがゆえに、いち早くドイツで国家がナチズムとして決断者の地位に就き、大衆の自然的欲求に応じて無秩序を収束させていった。しかしナチズムは、思想の名に値するいかなる体系も持たない、「人種」と「生存圏」を除けば便宜的な危機対応の集積に過ぎなかった。「一九三〇年代、社会から国家への転換が行われ、社会主義は、歴史に刻み込まれた法則が我々を導いて行ってくれる場所でなく、国家の決定によって混沌のうちから構成される望ましい社会形態となった。社会から国家への転換は、社会主義とナショナリズムとを結びつける」（清水，1966，100 頁）。今や清水は、社会主義の意味を一民主義と同様に「『経済の安定と福祉の増大とを目指す計画』のうちに、つまり生命的欲求の充足のうちにこそ認めるようになり、そうした社会主義がナチズムにおいて、本来異質なはずのナショナリズムと結合したと考える。このナチズムが、ヨーロッパにおける問題解決の範型となったのだった。「一九三〇年代は、ニヒリズムの実現の前に多くの思想が括弧に入れられた時期であり、進んで無思想を標榜するナチズムの支配した時期である」（清水，1966，118 頁）。

ナチズムが「二十世紀のニヒリズムの底における一九三〇年代の問題のドイツ的解決」であったとすれば、人民戦線は「十九世紀の記憶に頼っての」―即ち表向きは「大思想」を掲げての―そのフランス的解決であった、と清水は言う。フランスでは、30年代の危機を前にしても、共産党はコミンテルンの指導の下で社会民主党を主要な敵と見なす「社会ファシズム論」を唱えて、議席を減らし続けていた。そうした中、既に社会から国家への転換を遂げ、ナチスドイツからの国家防衛の必要を感じたソヴィエトが、フランス共産党に方針転換を命じた。ソヴィエトを守るために反ドイツの強力なフランスを作り出すこと、つまりフランスを反ファシズムで統一してソヴィエトと結びつけることが、共産党の課題となったのである。共産党は社会党に接近し、それまで嘲笑してきた現存体制内での「平和と民主主義」を新たな絶対者に据え、またドイツでナチズムの温床となり、マルクス主義の公理では早晩消滅するはずだった中間層を味方にするため、民族、国家、伝統を語り始めた。「ナチズムを防ごうとするものは、少しナチズムに似て来なければならない」(清水, 1966, 120 頁)。のみならず中間層を離反させないように、共産党は資本主義の擁護を訴え、飢餓からの解放を社会主義に期待する人々の革命的エネルギーを抑圧し、党が呼びかける「秩序の維持」に従わない者たちを「トロツキスト」と断じた。人民戦線は「ナチズムの影」であった。ナチスと闘うために、マルクス主義はナチスの無思想性に感染していったのである。1935年に人民戦線は「最も美しい季節」を迎え、7月14日の革命記念日には50万人が行進するが、「スローガンは反ファシズム一点張りで、資本主義や軍国主義への反対もなく、あるのは、階級を超え、思想を超えた全フランス国民の和解であった」(清水, 1966, 125 頁)。翌年、思想を捨てて「フランスの和解」を叫んだ共産党の努力が実を結び、社会党のブルムを首班とする人民戦線内閣が成立する。人民戦線政府は、ニューディールの影響を受けた政策綱領を掲げていた。「一九三〇年代の問題の解決のために多くの国々で行われた社会から国家への転換は、フランスでは、共産党によって人民戦線の名の下に行われたと見るべきであろう」(清水, 1966, 125 頁)。

かつて清水は資本主義批判の立場であり、ブルジョアジーの過剰な利潤追求も含めたその無秩序を危機の根源と考えていた。しかし自身も経験した大量失業の1930年代を、環境の変化や近代化理論の影響も受けとめつつ学び直した清水は、リベラリズムや社会主義といった思想が社会の「自然的」安定性を前提としており、それゆえその動揺に直面すれば無能力となることを改めて確認する。他方この時期に、結果としてブルジョアジーが自身の従来の思想圏から踏み出し、ニヒリズムという「二十世紀の積極的な精神」を発揮し始めたことを彼は発見した。ブルジョアジーは国家の力を動員して資本主義を維持し、そうして人々の自然的欲求を満たす秩序を構築し直したのであり、この努力の成果として「一九六〇年代」(『現代思想』第三章)には、「生産」ではなく「消費」が生活の中心となる「レジャー時代」が訪れつつあるのだった。「私が一九三〇年代を重要視する一つの理由は、大恐慌に始まる新しい事態の中で資本家の側が従来の原理や主義を投げ捨てて、悪戦苦闘の末、法則を封じ込め、人間の力で現実をコントロールする知識や技術を身につけたのに反し、左翼が、いよいよ歴史法則が立証されたと思ひ込み、実体化された歴史法則へのもたれかかりを一層深めて行ったところにある」(清水, 1963b, 40 - 41)。保守派はいち早く、「見えざる手」を捨てた。進歩派は自力で立とうとせず、「資本家による経済のコントロールやプランニングについて皮肉に肩をすくめて、曖昧に笑う」(清水, 1963b, 40) だけであった。

こうして20世紀の光景は一変した。日本は、学んだはずのヨーロッパ思想が「深く湛えたニヒリズム」を十分理解することができず²⁾、リアリズムの幻想に長く泥んでいたと、清水は振り返る。「野党のくせに」マルクス主義という守るべき何物かを持つため、自由に活動することも大衆の願望を受け

取ることもできない日本の革新政党にも、「イギリスの近代化と同じコースを自国が辿れないのを購い得ぬ原罪」（清水，1966，207 頁）と考える知識人にも、彼ははっきりと背を向けていく。混沌の前に無力であることを嫌悪し、そこへと先鋭的に切り込んでいくことを欲する「ニヒリスト」清水は、以後構成的精神の体现者としての国家に、特殊には近代化を推進した日本国家の側に立つ。早くも 1956 年に清水はアウシュヴィッツを訪れ、連行された若い母親たちが、共に連れて来られた幼子のために持ってきた一そして使われることのなかった一小さな肌着や玩具の山を目撃していた。ナチズムの異常さを知悉しながらなお、その無思想性や常軌を逸した犯罪行為を告発する者たちに向けて、清水は呟く。「生きたナチズムが牙を持っていた時代に、彼らの愛する思想や民主主義が問題解決の能力を示さなかったことも忘れない方がよいように思う」（清水，1966，82 頁）。

革命を真剣に希求していた頃の清水には、革命よりも国会進出など党の利益を重視した「無思想」な人民戦線路線は、「不潔」で「偽善に満ちた」（清水，1966，269 頁）ものと映った。立場を変え人民戦線を突き抜けて国家（近代日本）との一体化にまで進む清水に、今度はかつての左翼の仲間たちが罵声を浴びせていくだろう。『現代思想』の第二章「一九三〇年代」で、フランスの事例に続いてスペインの人民戦線を論じ、ソヴィエトの国家防衛上必要な「民主主義の擁護者」としての国際的信用を守るため、そこでもスペイン共産党が革命的な動きを容赦なく抑圧していったことを示した後、同章の末尾の節で清水はやや唐突に、ナチスに賭けたドイツの詩人ゴットフリート・ベンを取り上げている。ベンは 20 世紀の世界が無と化していることを知り抜き、それに抗する「人為の生命」を、与えられた現実を破壊して「事物の根源へ進む」構成的精神を信じた思想家であった。彼がヴァイマルを背を向け、ナチスに接近したのはそのためであった。「二十世紀の無が、ドイツ民族の無がヴァイマルに煮詰められる。ヴァイマルこそ巨大な無であり、無であることによって、ドイツ民族による構成への要求である。ヴァイマルは、克服されねばならぬ混沌であった」（清水，1966，166 頁）。共産主義者も同じくヴァイマルを葬り去ろうとしていたが、ナチスが政権を奪取した後に人民戦線運動が発展すると、彼らは一転してヴァイマルの民主主義を哀惜する歌を合唱し始める。「合唱するものは、仮にもヴァイマル共和国に疑いを抱いたという人間を許さない。ベンは、許されぬ人間の一人である」（清水，1966，166 頁）。構成的精神を信じるがゆえに革命を、続いて国家を積極的に支持することを決意し、またそれゆえに「民主主義」の名の下に批判され、そして糾弾されていくに違いない清水は、「他の誰よりも孤独」なこの詩人の姿に、自身を重ねていたのであろう。

3. 清水の思想における自然の台頭

このように社会主義的前衛から国家へと人為的構築の足場を移動させた清水は、それと同時に基本思想のレベルでも或る変化を遂げていく。ただし、既に指摘したようにその枠組自体は維持されたから、変化はその内部で、いわば重心の移動として遂行されたのだった。

『現代思想』では、19 世紀のリアリズムを掘り崩した先駆的天才たちの依拠した原理として、清水は「機械」と並んで「生命」を挙げている。「生命とは、高い硬度を持つ客体から成り立つ巨大なリアリティが信じられていた間、聳え立つ文化の蔭に空しく表現のチャンスを失っていた人間の苦しみ、恐れ、飢え、悲しみ、怒り、疑い、望み……およそ一切の人間的なものであった」（清水，1966，17 - 18 頁）。それまでも、「生命」つまり人間の内なる自然は清水の思想の主要な構成契機ではあった。た

だ、従来彼の言説の主たる関心は人為的構築に注がれていたため生命は後景に留まっていたのに対し、おそらくは人為の導きであったはずの思想のポテンシャルに対する失望と共に、清水は人間の内的自然の重要性を前面に押し出していったのである。「生命は生物学的な事実であった。それは人間の身体内部にあった。価値が彼岸的なものから此岸的なものに変じたというのは、天上から身体へ移ったということである。その時、価値は神や神々との関係を断って、人間の欲求と新しい関係を結んだ。……天上の価値に導かれる人間に代わって、内部の欲求に衝き動かされる人間が現れた。人間は、欲求というエネルギーを含むダイナミックな存在になった」(清水, 1966, 270 - 271 頁)。清水は自然にいつそう寄り添うようになり、人為にも自然との密着を、言い換えれば自然を自身の試金石として正面から受け入れることを求めるようになった。思想の基本層におけるこの微妙な変動は、『現代思想』におけるニーチェの哲学の論述に浮かび上がっているだろう。著書の構成上の位置から判断して、清水はそこで自身の新しい立場をも表明していると考えられるからである。

「人間は、混沌としての無のうちに投げ出された生命である。世界が意味に満ちたコスモスである限り、人間は端正な紳士であることが出来る。だが、世界が無意味の混沌である場合、主体とか人間とか言っても、それは美しい輪郭や統一を持つ存在であることは出来ない。主体や人間は生命という野性的なエネルギーに追いつめられてでなければ、大なる混沌と向き合うことは出来ない」(清水, 1966, 34 頁)。生命は、生命自身を中心とする遠近法をもって混沌に面し、それに抽象と構成とを加えて仮象の世界、フィクションの世界を作り出さねばならない。「混沌のうちに投げ出された生命が混沌への解消を拒否し得るのは、この遠近法のゆえである」(清水, 1966, 34 頁)。自然との一体性を保ち、それをいわば意味に満ちた人為の源泉としながらも、自然に抗ってフィクションを樹立する存在として人間を捉える清水の視線に、揺らぎはない。ただ彼は、人間における「生命」の枢軸性を、つまり人間と自然との繋がりをより強調し始め、それに伴ってまた「精神の離陸」によって乗り越えられなかった「人間を中心とする遠近法」をも、肯定的に語るようになったのだった。「我々の前提は、神もなく、目的もなく、あるのはただ有限なる力」というニーチェの言葉を、清水は「人間が二十世紀に生きるための前提」(清水, 1966, 37 頁)の要約と見なす。その有限な力、「生命という野性的なエネルギー」からこそ、人間にとって有意味なシステムは導き出されてくるのである。

基本思想の重心のこの移行の結果、清水の眼は近代主義的な演繹的な知に孕まれた歪みを、次第に大きく映すようになる。機械を肯定していたことから察せられるように、かつて清水は—『現代思想』の時点でもなお原則的には—そうした知のシステムを評価していた。しかし自身の「倫理学」を書くための準備作業である 1972 年の『倫理学ノート』になると、ムーアの倫理学、近代経済学、分析哲学が、生命あるいは「野性的エネルギー」を無視かつ排除したうえで、人為的に設定した公理から演繹的に構築された体系として、次々に批判されていく。知のこの誤った構築様式の源流を求めて清水はデカルトに遡り、同時に「デカルトの敵」としてのヴィーコを発見して、彼に強い共感を示した。清水の変貌をより踏み込んで捉えるために、彼のヴィーコ評価の着眼点をやや詳しく見ておきたい。

清水によれば、デカルト以前のヨーロッパの自然に対する向き合い方は「観察」であり、それは、「人間との間に全体的な関係を持つ自然への、どこかパッシヴなところのある態度」(清水, 1972, 269 頁)を前提としていた。「自然の観察の背後には、一方、美しい山河や花鳥の享受という側面と、他方、『手に負えぬもの、神秘なもの、危険なもの』としての自然への恐怖という側面とが隠れていたであろう。自然の内部には、人間が甘えたいくなるような好意と、人間を戦慄させるような悪意とが分かち難く結びついているために、それは測り尽すことの出来ぬ不透明なものであった」(清水, 1972, 269 頁)。

デカルトと共に自然は透明になった、と清水は言う。デカルト以後の新しい時代の人々、つまり近代人は、自然の中に好意や悪意ではなく、数学的構造を見た。数学を、そしてまた幾何学を基礎とする演繹的システムとしての物理学を手にした彼らは、自然の秘密を残りになく掴んだと考え、神のように自然を利用し、征服し、製作していった。清水の讃える構成的精神の最初の具現者の一人であるデカルトは、機械の原理の創始者の一人でもある。そのため『倫理学ノート』の清水も、既に引用した文章³⁾での構成的精神の課題とほぼ同じ言い回しを用いて、デカルト主義を「巨大な不透明な自然に包まれた人間が、翻って、その自然の姿を捕えようとする試み」(清水, 1972, 270 頁)と定義する。けれども以前とは違い、そこには否定的なニュアンスが込められていたのだった。

デカルト主義を批判するヴィーコは、「真なるものは、事実であり、作られたものである (verum = factum)」(清水, 1972, 274 頁)と主張する。ヴィーコによれば人間は、自分で作り出した事柄についてのみ真理を知ることができるのである。「神がリアリティの世界の王であるならば、人間はフィクションの世界の王である」(清水, 1972, 275 頁)。人間の作品である数学はともかく、自然は人為の産物ではない以上、デカルト主義者の物理学は、彼らの期待に反して蓋然性にしか到達しえない。「人間でなく、神が作り出した世界には、人間の到達し得ないものが最後まで残る。この大いなる残余を感じながら、人間はつねに謙虚でなければならない」(清水, 1972, 271 頁)。従ってヴィーコにとっての知識の確実性とは、「人間と宇宙との全体的な関係における、流れる時間のうちにおける、記憶や想像力や意思と結びついた確実性である。透明な自然における数学的確実性ではなく、不透明な自然に包まれた人間的確実性である」(清水, 1972, 270 頁)。今や清水は、ヴィーコが説くこうした「自然に包まれた」蓋然的な知識を、現在の自身の思想的方向性と照応させながら、自然的欲求から遊離していない「遠近法的な」知、野性的な知として称揚するようになる。清水によれば、ヴィーコ以後に蓋然的な知識をこそ重視したのが、社会学や倫理学など「精密度の低い」学問を諸学の統一者の位置に付けたコントであり、「おそらく」や「ひょっとすると」という語句を哲学に導入したジンメルであり、そしてプラグマティズムや功利主義であった。彼らの思想は、近代のいわば「表通り」であるデカルト主義に対する、「裏通り」となる流れ—しかしそれは決して反近代の流れではない—を形成している。『倫理学ノート』の清水は、デカルトに代えてヴィーコを彼にとっての近代の原点と見定め、この流れの中に自身をも組み入れていったのであった。

4. 右への急進化

しかし繰り返し述べているように、自然へとこうして身を寄せつつも、清水が自然に対する両義的な姿勢を失うことは決してなかった。『倫理学ノート』の末尾で、やはり彼は、混沌としての自然に呑み込まれまいとする危機意識に立ち戻っている。既に『現代思想』第三章で、「これまで自然と戦ってきた人間は、今後は自分自身の自然と戦わねばならない」というデニス・ゲーバーの予見を引用していた清水は、『倫理学ノート』では、基礎的欲求が満たされたため制御を失った生命にいかに秩序を与えていくかということが、「レジャー時代」の社会が対処すべき火急の課題となっている、と指摘する。清水は、人為を以て自然に秩序を構築するという関心を手放しはせず、また「建設や構成はすべて自然に内在する秩序の自発的展開に委ねようとする」(清水, 1972, 342 頁)傾向に対しても、強い批判意識を抱き続けたのである。「経済政策における自由放任は、この思考の型を代表するものであるが、

同じ思考の型は、歴史法則や人間的な自然への信頼という形式でも現れることが出来る」(清水, 1972, 342 頁)。この「思考の型」が根強く残っているせいで、現在自然的欲望は肯定され、十分に満たされたそれは野放図に膨張し、無軌道に暴れ回り始めつつある。そのことからやがて帰結するであろう社会の無定型化、無秩序化は、知によっては克服しえない。こうして「自然的欲望」の暴走を防ぐことこそが、清水の「倫理学」の課題となったのであった。

当然ながら 1972 年の清水にとって、倫理学は、ムーアのそれのように何らかの直覚された「価値」から演繹されることはありえなかった。知識の場合と同様に、道徳も、生命的欲求の次元に根ざしながら同時にそれを導いていくものでなければならない。道徳が課す「不愉快な拘束」に「或る積極的な意味」が与えられるとするなら、「それは、自然的欲望を超えるところの、意志によって支えられるところの平面において」(清水, 1972, 341 頁)である、と清水は言う。この平面でそれは、機械が外的自然を構築するように、内的自然に抗して秩序を打ち立てるだろう。崩壊しかけている「内的制裁を含む行為規則のシステムとしての道徳」(清水, 1972, 339 頁)を再建して、「意志による欲望の形成」(清水, 1972, 345 頁)を実現することだけが、混沌の到来を阻止するのである。そして道徳は、人間の内的自然の「自己鍛錬」(清水, 1972, 345 頁)の手段である以上、「宙に浮いた」ものであってはならず、その実効性が現に証されていなくてはならない。そうしたいわば「野性的な」行為制御規範を求めて、清水は、既にある一けれども一般的に否定的に考えられている—日本の近代化期の行為規範へと接続していったのである。

このように思想の次元で自然の比重が増大し、そのため行為規範にも野性的性格を要請するようになった結果、国家（特殊には日本）とそれが担った近代化過程を支持し擁護する姿勢を、清水はいっそう強めていった。自然は決して頼ることができないがゆえに、人間がそこに秩序を作り出していかなければならないという彼の思考の基本的枠組は、おそらくは関東大震災の経験をも一つの源泉として形成されたのであったが、清水は 60 年以後も大震災や新たな地震の到来の可能性について語り続け、1973 年の「明日に迫ったこの国難 一読者に訴える—」というエッセイでは改めて大震災の思想的意味を論じ、1975 年には大震災の被災者の体験談集『手記関東大震災』を自ら監修している。⁴⁾ けれども、人為的な構築の拠点の移動に伴い、清水が自らの基礎的枠組の中で大震災を具体的に解釈する際の着眼点、あるいは現在のためにそれから汲み出してくる意義は、一変していた。1960 年の清水にとって、地震がもたらす崩壊はブルジョア社会の無秩序のアレゴリーであり、そこから読み取るべき哲学とは、日本的な従順さからの脱皮と社会主義の方向への現存社会の克服であった。それに対して 1973 年の清水は、来るべき非常事態に備えて国家が「革命的方策」を樹立することのうちに大震災の現在の意味（と同時にその「救済」）を認め、こうした観点から現状の国家の無策を厳しく咎めていくのである。災害に際しては荒れ狂う「自然との戦争」が必要なのに、現在危険な任務を遂行する強さが日本人から失われていることをも、彼は危ぶんだ。「私は、前に、九月一日の経験を思い出して、生身の人間の弱さということに触れました。……生身の人間が、自らの弱さに打ち克って、何とか判断力を持ち続け、よろめく体を支えて、多くの人命が懸っている任務を遂行することが出来るとすれば、それは偏に、『滅私奉公』の精神が彼の内部に強く生きていた結果と言わねばなりません。そういう精神だけが、生身の人間を生身の人間以上のものに高めるのです。けれども、戦後二十数年間、『滅私奉公』という言葉ほど、知識人から嘲笑されて来たものではありません」(清水, 1973, 285 頁)。清水によればそうした強さは、戦前には「軍隊教育」が人々に植え付けていたのだった。「私たちは、みな軍隊教育を受けて来ました。それは、……滅私奉公のための規律、訓練、責任を叩き込む教育でした」(清水, 1973, 285

－ 6 頁）。

さらに清水は晩年になると、教育勅語のうち道徳を扱った箇所の普遍的意義を訴え、検閲が文筆に与えていた緊張と深みを主張し、国家統合の装置としての天皇制の重要性を強調していく。「清水幾太郎の時代」とは反対の方向へのこうした先鋭化は、ここまで見たように『現代思想』や『倫理学ノート』によって遂行された転換の或る程度は必然的な帰結ではある。だが同時代に彼と歩みを共にできた者は少なかったであろうし、置き去りにされたかつての同志は、非難しない場合にも茫然と立ち竦むことしかできなかつただろう。そのため 1988 年の清水の死は、奇妙な沈黙によって見送られることになったのだった。⁵⁾ ここでは、物議を醸した清水のこれらの主張の正否は問題とはしない。ただ指摘しておきたいのは、内的自然の規律訓練のために近代化期の行為規範を復権させることは、明らかに、清水の批判する「リアリズム」の台頭にも繋がりがかねない、という点である。確かに晩年の清水が推奨する規範は、人を無力にも無防備にもせず、潜在的に敵対的な自然であれ油断できない国際社会であれ、外部に対して戦闘的にする性質を有していた。しかし外への敵対と、清水自身説くように⁶⁾それが帰結させる内的凝集とは、彼によれば人間存在の根本的な構造である自然との「オープン・システム」を、閉ざしてしまう恐れがある。野性的性格が重視される余りに制度や規範との距離が失われるとき、それらの虚構的性格は容易に忘却され、人は自身の生きる現実を「リアリティ」と受け取っていくのではないか。清水自身、ドイツ人読者のために天皇制の「イロハ」を紹介した 1973 年のテキスト「天皇論」で、フィクションがそれを生きる国民の間で、特に絶えず死を覚悟せねばならない軍人の間で生きたリアリティになっていき、「フィクションはそれを作り出したものに向って復讐を遂げ」（清水、1973a, 105 頁）たことを説明していた。「かつてフィクションとして作られた観念が、それを作った人々が既に死んだ一九三〇年代の危機の中で、何人も抗しがたい大義および武力をもつて、天皇を取り囲む諸勢力の代表者に向って挑戦したのである。……他の国々と同じように、日本でも、一九三〇年代の危機は、多くのイデオロギーの問題解決能力をテストした。……外来のイデオロギーは、残念ながら、一九三〇年代には全く無力であった。……後に残ったのは、古い伝統を持ち、明治維新を通じて強化された天皇イデオロギーだけであった。それは、一九三一年に満州事変が勃発し、一九三七年にそれが日華事変へ拡大し、さらに一九四一年の太平洋戦争の開戦へと進んでいく過程において、危機感の増大と結合して急速に純粹化されて行った」（清水、1973a, 109 頁）。清水は、自身の言説が或る危うさと接していることには、十分自覚的であつただろう。とはいえ、少なくとも自家撞着を孕む点で、晩年の彼のテキストが問題性を帯びていることは否定できない。

混沌とした自然の中に投げ込まれた、それゆえ絶えず危機に晒されたニヒリストとして自己を理解している限り、清水が安定や政治の一貫性を保つことは原理的に困難ではあつただろう。しかし他方で、『倫理学ノート』以後の展開の評価とは別に、清水幾太郎の思考の基本的な構え自体は、現在でもなお意義を失っていないと思われる。ユートピアの消失や、消費社会における「遊戯」の世界の誕生を説く『現代思想』第三章「一九六〇年代」が、1980 年代以降に流行したポスト・モダンの先取りとなっているというばかりではない。1988 年の清水の死後、ソヴィエト連邦は瓦解して歴史法則への信頼は大幅に減退し、その流れの中でマルクス主義の敵手としての「人間的な自然」への信仰が再燃した後、社会的な不正の問題化や金融恐慌の発生に伴いそれもやがて沈静化していった。大思想体系の崩壊、つまりは自然や法則への不信を前提とし、複眼的に自然を捉える視点の下で人間存在や制度を問うていく清水の根本理念⁷⁾は、歴史が関したこうした変転によって色褪せていくどころか、むしろ

意外な現在性を秘めた教説として我々に現われてくる。清水幾太郎の思想は、例えばおりおりの大震災の解釈の試み以上に、原則的には徹底したニヒリズムを維持したその「哲学的」次元のうちにこそ、今日顧みられるべき視点を含んでいるのではないだろうか。

注

- 1) 清水は護憲運動に関しても、密かに社会主義という目的を設定していた。「憲法そのものの精神に従って、これをギリギリの限界まで生かし抜くならば、当然、われわれは、社会主義に最も近い地点まで進み出ることができる。……憲法がわれわれを導いていく最後の地点は、我々が重大な障碍なしに社会主義へ進み得るような、そういう地点である。いや、社会主義という言葉の使用法の如何によっては、憲法を守りながら、ナシクズシに社会主義を築き上げることができるであろう。……この憲法擁護の大群が大きな戦闘力を持つ集団に組織されるということを措いて、日本の革命は問題になることは出来ないであろう」(清水, 1957, 294-295 頁)。
- 2) 平和運動時代の清水も、ヨーロッパの思想家たちが漏らす絶望の声を、近代以降のカトリック思想家の嘆きと重ねたり、没落に瀕したブルジョアジーの苦悩の表現と解釈するなどして、相対化していた。社会主義的構成への希望が、清水本来のニヒリズムを抑えていたのであろう。ただし、例えば 1956 年に書かれた次の文章からは、ヨーロッパのニヒリズムにどうしようもなく共感する清水の姿が浮かび上がっている。「[ヨーロッパの] 大部分の思想家は、一切の善いもの、一切の美しいもの、一切の貴いものが、いや、この自分自身が底のない破滅の淵へ沈むのを悲しんでいるのであった。危機を免れる方策に触れている人々も決して少くはないが、その人たちの提示している方策は、その人たち自身が警告する危機の深さと絶対に釣合のとれぬ思いつきに類するものが多く、方策そのものを貫いて絶望の息づかいがハッキリと聞えるのであった。私は……高名の思想家たちの絶望の歌を聞きながら、『新しい三十年戦役』[チャーチルは、第一次大戦と第二次大戦とを一体と捉えて、こう表現している]の時代を生きて来た」(清水, 1956, 26 頁)。
- 3) 清水, 1943, 330-332 頁。
- 4) 清水はさらに 1977 年と 1978 年にも(清水, 1977, 1978), いつ来るかもしれない地震に対して警鐘を鳴らした文章を新聞に発表している。
- 5) 死後の清水の評価については、大久保孝治の論文(大久保, 1999)を参照せよ。
- 6) 「何人も知る如く、二つの集団が相互に闘争する時、他にこれを妨げる条件のない限り、各集団の成員は強い愛情を以て結合されるのが常であり、この愛情を基礎として各集団が大きな力の主体となることは明らかである。闘争はそれ故にこの大きな力を生み出すための機縁となる筈である」(清水, 1941, 197 頁)。
- 7) 清水の思想は、ニーチェとの重なりも示唆するように、日本におけるポスト・モダンの先駆けである。ただし、おそらく清水の思想形成に最も大きな影響を与えた人物は、彼自身は明記していないものの、生(自然)と形式の弁証法と説いたジンメルであろう。有名なジンメルの廢墟論を、清水は次のように要約している。「約束に従って、少しジンメルを紹介しよう。……彼によると、人間の精神的意志と自然の必然とは、建築の中で特殊な均衡に達している。文学や絵画や音楽では、……自然は精神にたいしてきわめて従順である。ところが、建築の場合の材料となると、これは自己の

法則を持ち、自己の重量を持っている。人間の精神が自然のこうした力を組み伏せたところに、両者のあいだに独自のバランスが生まれるところに、建築物というものの美しさは成り立っている。ところが、この建築物が崩れ始める瞬間、精神と自然とのバランスが失われ始める。バランスとはいえ、完成した建築物の示すものは精神の勝利であるのだから、崩壊とともに始まるものは自然の復讐ということになる。精神と自然との敵対関係がここにふたたび現われてくる。かつて精神の暴力に屈したかに見えた自然が、そのまだ失われなかった力を示しはじめる。それゆえに、廃墟は、他の芸術品の破片とは異なった意味を持っている。他の芸術品の破片が『減った芸術品』であるのにたいし、廃墟は、精神と自然との右のような関係のために、『一つの新しい全体』を形づくる。廃墟にあっては、人間の作ったものが自然の産物のように見える」（清水，1955，89-90 頁）。

引用文献

＊清水の論文および著書には初出の年（論文の場合は最初に雑誌に掲載された年，著書の場合は発行年）を記し，その後で，著作集（清水禮子責任編集『清水幾太郎著作集』，講談社，1992－1993）に収録されている場合には著作集の巻数と掲載頁を，著作集以外の単行本に収録されている場合には当該本の書名，書誌事項（発行所名，発行年）および掲載頁を，それぞれ記載する。引用は，著作集あるいは記載した単行本から行っている。

なお引用の際，旧仮名・旧字体はそれぞれ新仮名・新字体に改めた。

大久保孝治（1999）「忘れられつつある思想家—清水幾太郎の系譜—」，『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第44輯第一分冊

清水幾太郎（1941）「深淵から」，『著作集第5巻』，197-205 頁

清水幾太郎（1943）「現実の再建」，『著作集第6巻』，301-336 頁

清水幾太郎（1946）「体験と内省」，『朝日評論』6月号（なお，著作集第19巻の執筆目録には雑誌初出時の題名として「戦争の経験」と記載されているが，実際は「体験と内省」である。）

清水幾太郎（1953a）「占領下の天皇」，『現代文明論』，岩波書店，84-114 頁

清水幾太郎（1953b）「内灘」，『著作集第10巻』，73-100 頁

清水幾太郎（1955）『日本が私を作る ドレイ根性からの解放』，光文社

清水幾太郎（1956）「現代の思想と歴史」，『現代思想入門』，岩波書店，1959，1-44 頁

清水幾太郎（1957）「日本の革命」，『現代思想入門』，288-324 頁

清水幾太郎（1960a）「今こそ国会へ——請願のすすめ」，『著作集第10巻』，115-132 頁

清水幾太郎（1960b）「安保戦争の「不幸な主役」——安保闘争はなぜ挫折したか・私小説風の総括」，『著作集第10巻』，133-153 頁

清水幾太郎（1963a）「無思想時代の思想」，『著作集第11巻』，10-26 頁

清水幾太郎（1963b）「野党の思想的条件」，『著作集第11巻』，27-45 頁

清水幾太郎（1966）『現代思想』，『著作集第12巻』

清水幾太郎（1972）『倫理学ノート』，『著作集第13巻』

清水幾太郎（1973a）「天皇論」，『著作集第17巻』，84-112 頁

- 清水幾太郎 (1973b) 「明日に迫ったこの国難 —— 読者に訴える」, 清水幾太郎監修『手記 関東大震災』, 新評論, 1975, 263-288 頁
- 清水幾太郎 (1975) 『わが人生の断片』, 『著作集第 14 巻』
- 清水幾太郎 (1977) 「地震・民主主義・秋声」, 『著作集第 17 巻』, 130-132 頁
- 清水幾太郎 (1978) 「あらくれ」, 『著作集第 17 巻』, 132-135 頁
- 清水幾太郎 (1979) 「戦後史をどう見るか」, 『著作集第 17 巻』, 292-309 頁
- 清水幾太郎 (1980) 「新しい戦後」, 『著作集第 17 巻』, 231-291 頁
- 清水幾太郎 (1984) 『ジョージ・オーウェル「一九八四年」への旅』, 文藝春秋

参考文献

- 五百旗頭真 (2001) 『日本の近代 6 戦争・占領・講和 1941 ～ 1955』, 中央公論新社
- 猪木武徳 (2000) 『日本の近代 7 経済成長の果実 1955 ～ 1972』, 中央公論新社
- 清水幾太郎 (1946) 『日本人』, 要書房
- 清水幾太郎 (1954) 『現代社会批判』, 講談社
- 清水幾太郎 (1986) 『「社交学」ノート 世紀末に生きる』, ネスコ
- 長幸男 (2001) 『昭和恐慌 日本ファシズム前夜』, 岩波書店
- ベン, ゴットフリート (1972) 『ゴットフリート・ベン著作集 第 1 巻』, 山本尤訳, 社会思想社
- Georg Simmel, *Philosophische Kultur*, potsdam, 1923